

女性 の 群 れ 意 識 に 関 す る 調 査

——同性コミュニケーション社会——

昭 和 59 年 1 月

ポ ー ラ 文 化 研 究 所

< 調 査 >

1. 調査の趣旨

わが国では、女性は同性のグループ（群れ）への吸引力が強く、同性グループの中での原理が社会的行動の基準を支配しているように思える。多くの女性は家庭という私的な単位に基本的行動原理があるのだが、その中でも父親や兄弟より母親や姉妹たちの影響が強い。さらに、社会へ参加するときも、専業主婦は言うに及ばず、行動半径の大きい独身女性や有職主婦でさえ、その行動基準は同性の集団（あるいは群れ）の原理に左右されているのではないだろうか。

本調査は、そんな疑問から出発し、女性の社会的拡がりの実態と、彼女たちがかわり合う社会の構造的特徴を明らかにしようとしたものである。

2. 調査の概要

・調査地域………東京及びその郊外

・調査対象………20歳以上の成人女性

質問紙配布サンプル数 697 枚

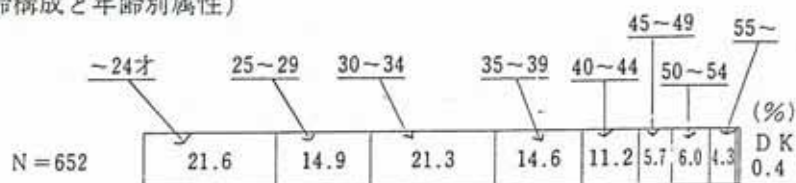
うち有効回答数 652（有効回答回収率 93.5 %）

・調査時期………昭和58年 8 月

・調査方法………アンケート方式

3. 回答者の属性

（年齢構成と年齢別属性）



	学歴				
	中 学	高 校	短 大	専 門 学 校	大 学
全 体	5.2	43.3	18.1	12.9	18.4
～ 24歳	1.4	25.5	34.0	15.6	22.7
25 ～ 29	1.0	29.9	24.7	14.4	28.9
30 ～ 34	1.4	47.5	10.8	17.3	22.3
35 ～ 39	3.2	48.4	18.9	12.6	16.8
40 ～ 44	8.2	57.5	11.0	8.2	13.7
45 ～ 49	16.2	59.5	10.8	—	5.4
50 ～ 54	25.6	64.1	—	5.1	—
55 ～	14.3	53.6	—	14.3	3.6

職業						
専 業 主 婦	パ ー ト タ イ ム	フ ル タ イ ム	自 営	独 有 職 身 者	学 生	そ の 他
36.2	9.8	12.9	6.9	24.7	4.8	3.5
3.5	0.7	0.7	2.1	67.4	22.0	2.8
32.0	2.1	14.4	5.2	39.2	—	5.2
61.9	6.5	17.3	4.3	7.9	—	2.2
44.2	16.8	17.9	10.5	8.4	—	2.1
43.8	24.7	20.5	5.5	4.1	—	1.4
37.8	27.0	10.8	10.8	8.1	—	—
33.3	12.8	20.5	20.5	5.1	—	2.6
39.3	10.7	3.6	17.9	3.6	—	25.0

未婚・既婚 (%)				
独 身 (同 居)	独 身 (別 居)	既 婚 (子 なし)	既 婚 (乳 学前)	既 婚 (小 学 以 上)
24.7	7.1	5.4	36.3	25.6
81.6	10.6	2.1	2.8	1.4
27.8	15.5	15.5	39.2	1.0
5.8	4.3	2.9	80.6	5.0
4.2	4.2	7.4	64.2	20.0
5.5	1.4	2.7	28.8	61.6
5.4	5.4	5.4	2.7	81.1
—	5.1	2.6	—	89.7
—	3.6	3.6	—	92.9

(%)

	一か月当りのおこずかい							居住形態						
	なし	5千円未満	1万円未満	2万円未満	3万円未満	5万円未満	5万円以上	持(一戸建)家	持(集合)家	借(一戸建)家	借(集合)家	公営住宅	社宅・寮	その他
全 体	4.4	7.2	14.1	17.6	18.3	13.8	22.5	41.7	10.7	4.1	15.6	8.9	14.1	4.1
～ 24歳	0.7	7.8	8.5	8.5	18.4	21.3	34.8	56.7	7.1	1.4	12.8	7.1	7.8	5.7
25 ～ 29	6.2	6.2	14.4	10.3	19.6	12.4	28.9	32.0	13.4	7.2	26.8	6.2	12.4	2.1
30 ～ 34	3.6	11.5	22.3	19.4	20.1	7.9	12.9	20.9	14.4	4.3	17.3	10.8	27.3	3.6
35 ～ 39	7.4	7.4	3.2	29.5	16.8	16.8	15.8	31.6	13.7	7.4	16.8	9.5	20.0	1.1
40 ～ 44	5.5	5.5	21.9	21.9	13.7	13.7	17.8	46.6	12.3	2.7	13.7	6.8	9.6	8.2
45 ～ 49	5.4	2.7	21.6	8.1	29.7	10.8	13.5	62.2	2.7	2.7	8.1	13.5	5.4	5.4
50 ～ 54	5.1	5.1	7.7	33.3	17.9	10.3	15.4	64.1	7.7	—	5.1	15.4	5.1	2.6
55 ～	3.6	—	17.9	21.4	3.6	10.7	42.9	67.9	3.6	7.1	7.1	7.1	—	7.1

注) 職業のパートタイム、フルタイムはすべて有職主婦。

独身の(同居)、(別居)は、(親との同居)または(親との別居)の意。

4. お問い合わせ先

。ポーラ文化研究所 (村澤)

〒104 東京都中央区銀座1-7-7 ポーラ銀座ビル3F

TEL 03-564-3651

。(株)ポーラ化粧品本舗 広報部 (石山または、水野)

〒141 東京都品川区西五反田2-2-3

TEL 03-494-7111

< 結果の要約 >

本調査の結果、女性の社会的拡がりの実態と彼女たちがかかわり合っている社会の構造的特徴が、はじめて明らかにされた。つまり、女性の対社会関係とはほとんどが女性社会であり、「男女棲み分け」の社会構造がくっきりと浮かび上がった。とくに、そうした女性の社会構造は、母（実母）―娘―姉妹の強力な「血縁のきずな」を軸とした同性の環で支配されている。その意味では、化粧も、対女性の社会の中で行われる行為の一つといってよいだろう。

1. 女性は女性に話す She Speaks to Her
——男女棲み分け社会——
2. 母と娘の絆
——母と娘は臍の緒でつながっている——
3. 男性の役割り
——金と社会の窓口は男性——
4. 夫の影響は大きい
——亭主の好きな赤烏帽子——
5. 実家の同性依存と嫁ぎ先の同性
——母娘の絆の反作用としての嫁姑の仲——
6. 学友・職友のコミュニケーションの大きさと継続性
——この自己共鳴型の群れ——
7. 外出行動と化粧（メイク）
——クラス会に表われるライバル意識——
8. 学歴別にみる親の像
——4年制大卒は批判型、短大卒は甘え型、専門校卒は密着尊敬型——
9. 「生まれ変わっても夫のような男性と結婚したい」＝46％
——4年制大卒は別人格密着型、短大卒は甘え密着型、専門校卒は自立型——
10. 娘離れしない母親
——息子への依存より、娘へのコミュニケーション——

1. 女性は女性に話す She Speaks to Her

——男女棲み分け社会——

図-1は、女性が人生や生活上のいろいろなテーマについて

・誰に相談するか（コミュニケーション・フェーズ）

→お金の相談は、化粧や服装についての相談は、生き方についての相談は、等々。

・誰と共に行動するか（コンパニオン・フェーズ）

→スポーツをするのは、ふだんの買物をするのは、冠婚葬祭に行くのは、等々。

・誰に影響を受けるか（インフルエンス・フェーズ）

→人生の取組み方、男性への好みや評価、育児や子供の教育、等々。

を質問した結果、その回答比率の平均値が

・日頃接触している人々の比率（コンタクト・フェーズ）

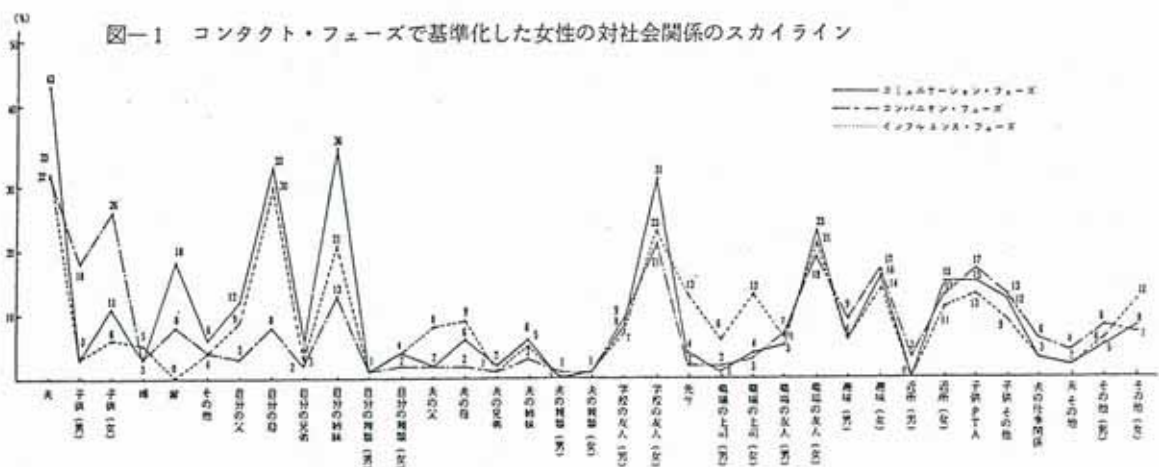
に対し、どれだけの割合になるかを示したものである。

このようにコンタクト・フェーズに対する比率で各フェーズを表わしたのは、調査対象者には、独身者も既婚者もいるし、それぞれの年齢、その他の生活の仕方によってコンタクトの全くないケースもあるので、コンタクトの割合で基準化して、コミュニケーション、コンパニオン、インフルエンスの各フェーズの割合を見ることによって、どれくらいのインパクトが与えられているのかを見ようとしたのである。

その結果、一見してわかる通り、夫を除いて女性は同性に相談し、同性と行動し、同性の影響を受ける割合が高いことがわかる。

血縁の家族でも、父よりは母、兄弟よりは姉妹の割合が高いが、血縁外の場合は、更に女性の割合（学校の友達と男友達の違いなど）が高くなる。

男性の調査をしていないので確定的にいうことはできないが男性は男性、女性は女性という棲み分けがきれいにできていることが容易に推測できるのである。



(注) それぞれの数値は、コンタクト・フェーズで基準化したもので、たゞし、夫のコミュニケーション・フェーズの数値は「コミュニケーション・フェーズで基準化した女性の対社会関係のスカイライン」に100である

2. 母と娘の絆

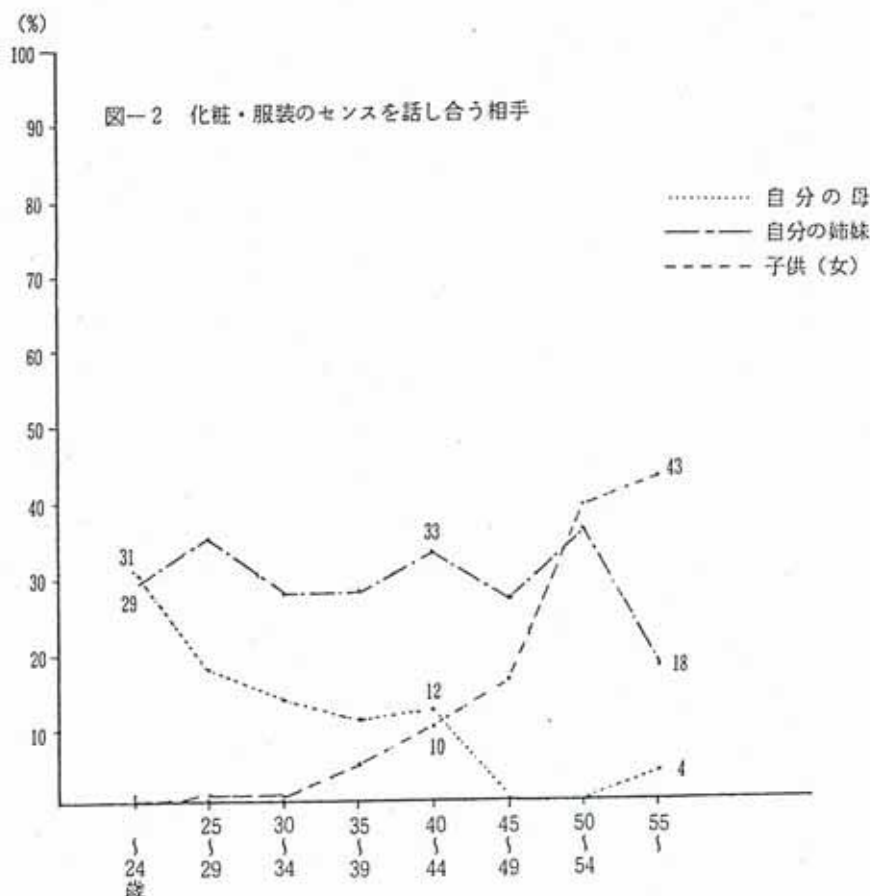
——母と娘は臍の緒でつながっている——

前掲の図-1でもわかるように、自分の母、自分の娘とのコミュニケーションは太いパイプでつながっている。

それによると、全体としては、母から娘への影響（インフルエンス）が強い。そして、相談（コミュニケーション）は娘から母へである。また、母の方が娘と一緒に行動したこと（コンパニオン）の印象が強く、娘の方は、母と行動を共にしたことへの印象はうすい。

これは補足したインタビュー調査の中でも、母親の影響が強いことを認めながらも「行動は別として、考え方は受け継ぐ」といっている。このように、行動については年代、世代が異なり、娘の方からはコンパニオン・フェーズでの母親の印象はうすいことが認められた。

面白い例として、化粧や服装のセンスについて相談する度合を年令別でみると、図-2のようになり、コミュニケーションの相手が母から娘へと移行する様子がはっきりわかり、母と娘の絆の在り方を象徴的に物語っている。そして、その分岐点は、40～44才位のところである。なお、この種の相談相手としては、姉妹が一貫して力を持っていることがわかる。



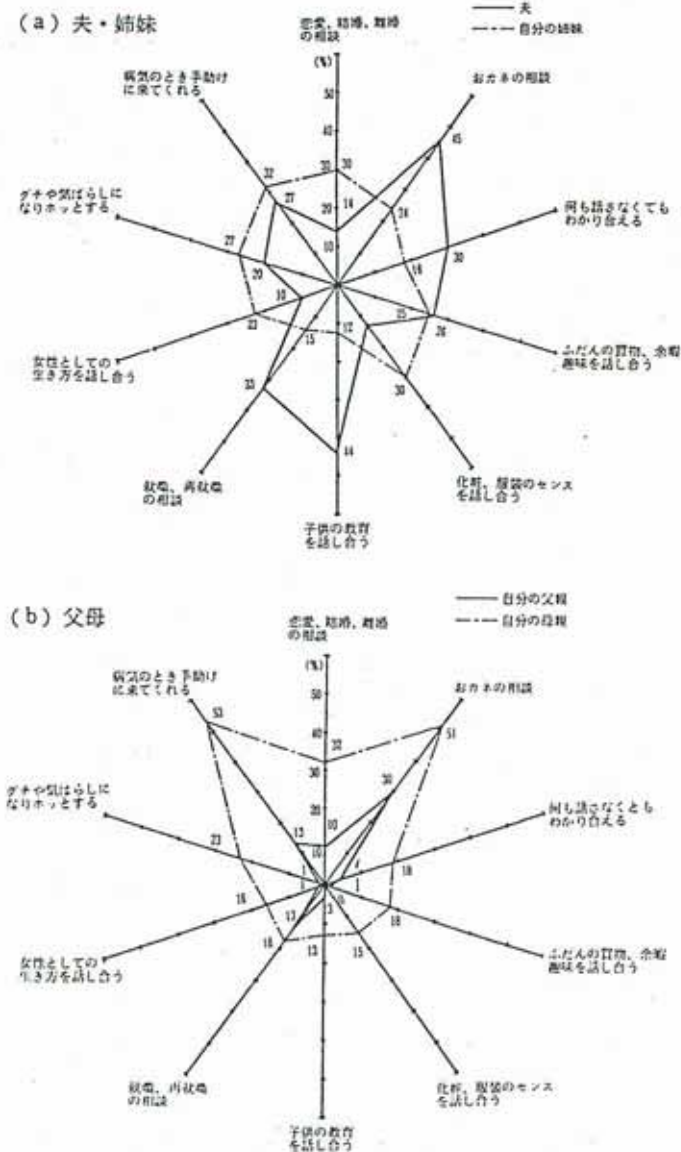
3. 男性の役割

——金と社会の窓口は男性——

男女棲み分け社会なので、男性の出る幕はなかなかないが、図-3のように金と就職、再就職の相談では夫と父親の出番は大きい。本アンケートの項目にはないが、インタビューすると父親に対しては、銀行への交渉、警察への相談などがある。このように男性の社会的地位の利用、あるいは社会の機構を熟知した上での事務処理能力や判断への依存度が高いことがわかった。インタビューの中でも、独身女性の多くは（総てではないが）父親は物心をつく頃から、うっとおしい、のけものであって話題も合わなく、コミュニケーションの量が少ないことを認めている。

図-3に見る通り、父の出番があるとはいえ、母と比較するとその存在感は希薄である。これに対し、夫はやはり、一家のパートナーとして頼りにされる存在である。選ばれた婿に対して父親が娘を奪われたという感情を持ちつつも、娘の一生を託すという願いをこめるのも、この辺の機微を無意識に感じとるからであろう。

図-3 コミュニケーション・チャート

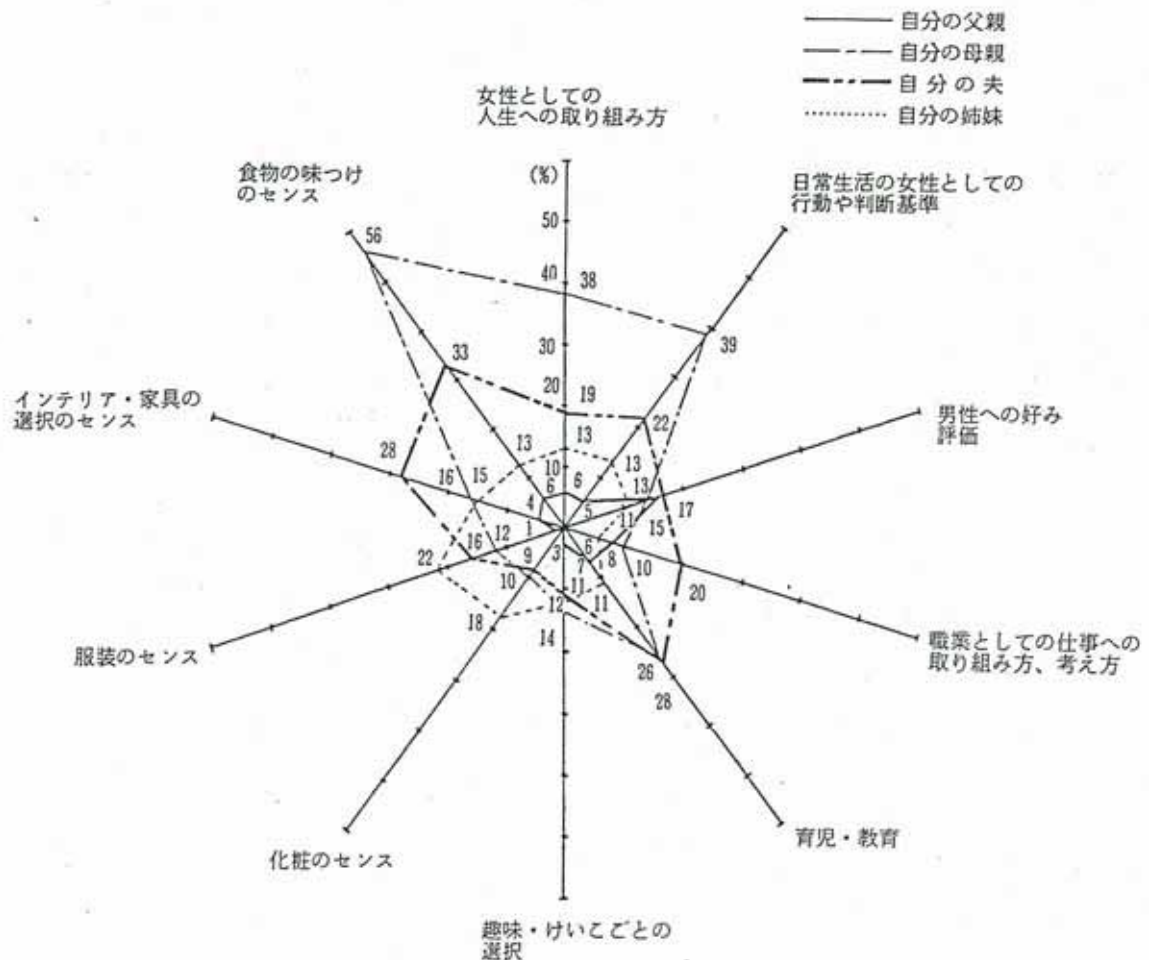


4. 夫の影響は大きい

——亭主の好きな赤烏帽子——

全体的に見て、夫の影響（インフルエンス）は異性の中では抜群である（図-1）。また、前項で見た通り、コミュニケーション・フェーズの各面でも頼りにされる存在である。当然のことながら、父親に比べても、その影響力は比べものにならない。インフルエンス・フェーズでそれを見ていくと、服装や化粧のセンスを除けば、夫は大きな存在であり、食物の味つけやインテリアのセンスについての夫の影響は大きい（図-4）。昔から亭主の好きな赤烏帽子といわれるだけのことはある。

図-4 インフルエンス・チャート



5. 実家の同性依存と嫁ぎ先の同性

——母娘の絆の反作用としての嫁姑の仲——

自分の実家との親密な関係に比べれば、嫁ぎ先の家族（夫の実家）との関係にはやはりどこかよそよそしさが残る。（図-5、表-1）コミュニケーション面、行動面、影響面とも、嫁ぎ先との関係は自分の実家との比ではない。血縁は強しである。実家依存の対人関係が前面に浮かび上がる。

ただし、夫の実家はコミュニケーション面、行動面に表われている見かけの関係以上に、「食物の味つけのセンス」「子供の育児教育」「女性としての人生への取り組み方」などの点で隠然とした影響力をもつ。しかしそうした影響力も夫の存在を通じた間接的なものといってよからう。

また、行動面で「食事に招く」比率が比較的高い。一緒に出かけたり、どこか街角で落ち合って一緒に行動するというよりも、「食事に招く」といった家庭単位のつき合いとして、一線が画かれているように見える。

少なくとも、自分の実家とは家庭単位のつき合いといったよそよそしいものではないはずだ。実の娘であれば嫁といった「立場」に対する配慮など何もいらない。もし、実家と地理的に離れていたとしても、電話や手紙で交信し合う。最近では宅急便の利用も盛んだ。家庭単位の制約をすり抜けて、母へ、姉へ、妹へと血縁で支えられた直接的なコミュニケーション・ルートが太く開かれている。

その意味では、姉や妹のいない女性は淋しい。特に歳をとり実母が年老いたり、子供も手離れすると、姉や妹のコミュニケーションが復活する。その時、姉妹がない場合には、相手はもう自分の娘以外にいない。従って、長男長女型社会といわれる出産子供数の低下は、女性の対社会関係に大きな変化を迫っているといえよう。つまり、姉妹のいない女性、娘のいない女性にとって、母親の存在は、コミュニケーションの相手としてより大きくなり、姉妹に替る学友、職友等の結びつきがより強くなるであろう。そして、母親が高齢化する中年以降は職場あるいはコミュニティの中に溶けこまない限り、淋しいものとなろう。

図-5 実母・姑のコミュニケーション・チャート

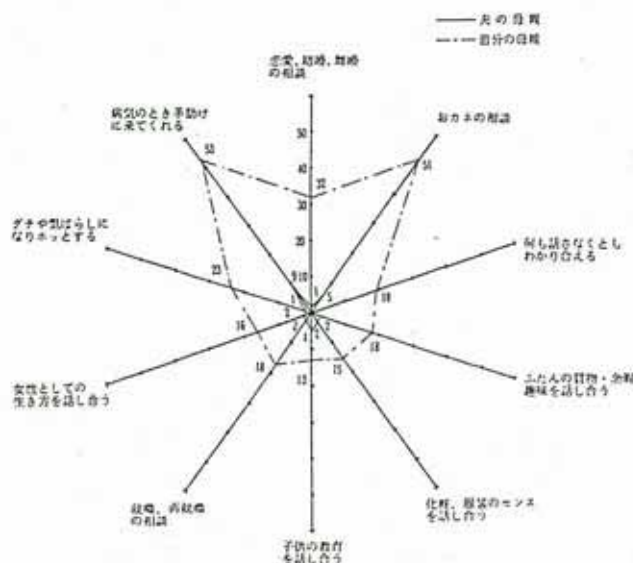


表-1 グループ別相互交流度の比較

		自分の母親	夫の母親	学校友人女	職場友人女	趣味を通して女	近所で(女)
コミュニケーション	a. 恋愛、結婚、離婚の相談	32	1	41	17	8	4
	b. おカネの相談	51	5	8	4	2	1
	c. 何も話さなくともわかり合える	18		28	6	7	3
	d. ふだんの買物や余暇・趣味を話し合う	18	2	34	21	20	16
	e. 化粧、服装のセンスを話し合う	15	2	33	24	17	15
	f. 子供の教育を話し合う	13	4	9	7	6	10
	g. 就職・再就職の相談	18	2	17	10	7	4
	h. 女性としての生き方を話し合う	16	2	41	25	16	14
	i. グチや気ばらしになりホッとする	23	1	38	22	13	15
	j. 病気のとき手助けにきてくれる	53	9	12	4	5	9
コンパニオン	a. 趣味やけいこごとをする	1		22	13	23	14
	b. スポーツをする	1		23	16	15	11
	c. カルチャーセンターや講習会に行く	1		15	11	11	9
	d. 音楽や映画の鑑賞をする	2		28	16	12	7
	e. ふだんの買物をする	14	1	13	10	8	13
	f. 繁華街でショッピングをする	13	1	23	12	10	9
	g. 1泊以上の旅行に出かける	6		24	16	9	4
	h. ちゃんとしたレストランで食事をする	12	1	14	12	5	3
	i. PTAや子供会に行く	1			1	4	10
	j. 食事など自分の家庭に招く	8	5	20	8	10	10
インフルエンس	a. 女性としての人生への取り組み方	38	6	27	14	10	5
	b. 日常生活上の女性としての行動や判断基準	39	6	24	14	9	9
	c. 男性への好み・評価	13	1	28	13	8	3
	d. 職業としての仕事の取り組み方や考え方	10	2	15	22	5	3
	e. 育児・教育	26	7	9		4	9
	f. 趣味・けいこごとの選択	14	1	25	13	15	9
	g. 化粧のセンス	10	1	27	19	13	9
	h. 服装のセンス	12	1	30	20	13	10
	i. インテリア・家具のセンス	16	2	16	8	7	9
	j. 食物・味つけのセンス	56	13	7	6	6	7

6. 学友・職友のコミュニケーションの大きさと継続性

——この自己共鳴型の群れ——

学校と職場を通じた交友関係（主に同性）はほぼ同質のものであり（図-6）、親族以外の女性の対社会関係の中で最も重要なものである（表-1）。特に20代での学友、職場の友人との相互交流の度合は大きい。たとえばこの交友関係には、

- ・「恋愛・結婚問題」を含めた「女性としての生き方」
- ・「ふだんの買物や余暇・趣味」「化粧・服装のセンス」などの具体的で文化的な側面
- ・序論を抜きにしてすぐに本題に入れることから「何も話さなくともわかり合える」「グチャや気ばらしになりホッとする」

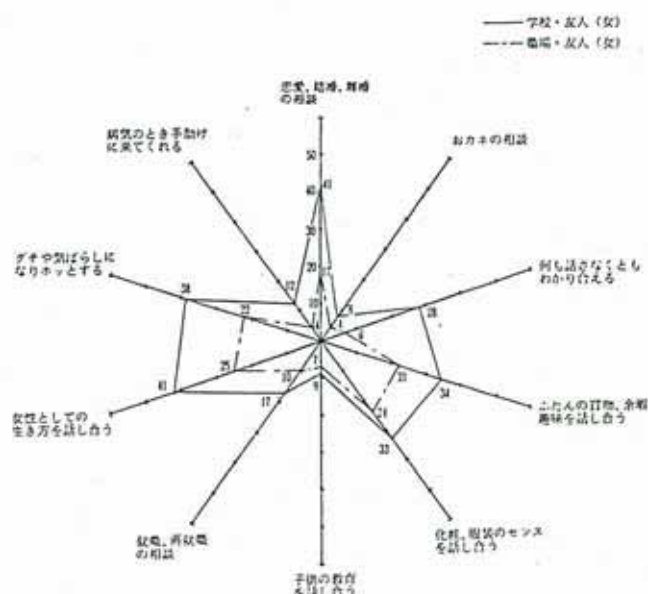
などの点で緊密なコミュニケーション関係が生まれており、そうした頻繁な接触を通じて互いに活発な影響を与え合う。

ただ、この交友関係の性格は「じっくりいく女性は、同じ感じ方をする人、感じ方は違ってもその理由がわかる人、同じ路線の人……」（インタビュー結果）が多く、影響を受けるといっても、あくまで「自己共鳴的」で同質（同じ意味、同じ感覚）の中での影響が中心らしい。

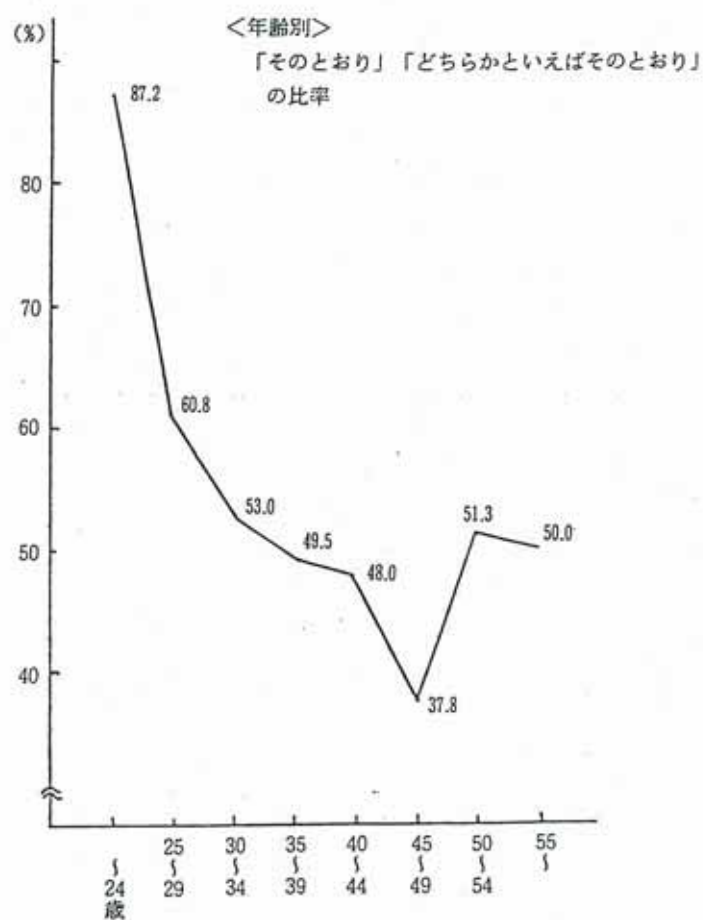
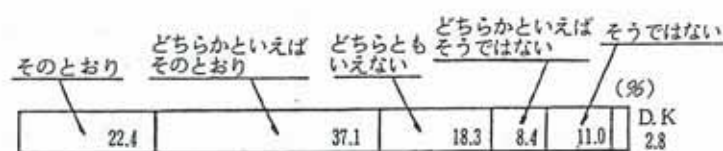
この相互交流は年齢で追うと20代を過ぎると急速に減る。例えば「友人の賛成が得られると安心できる」という項目を肯定する比率は20代が最も高い（図-7）。それが、結婚して自分の家庭をもちライフステージ上の経験を積むにつれて自分の価値観も固まってくる。そうすると「友人の賛成」は「家庭の事情」を知らない他人の意見であり、マトはずれの意見になる。

だから、学校や職場を通じた交友関係に比べれば、ライフステージ上学友や職友の後に広がる趣味や余暇、近隣を通じた交友関係は、学友・職友と似た性格をもつ関係でありながら、全般に弱く限定されたものとなる。（表-1）

図-6 学友・職友のコミュニケーション・チャート



図一 7 「何かしようとするとき友人の賛成が
得られると安心できる」



7. 外出行動と化粧（メイク）

——クラス会に表われるライバル意識——

「冠婚葬祭」「同窓会、クラス会」「ちゃんとしたレストランで食事」というこの3つの機会ほど、女性が「きちんとメイク」して出かけるときはない。なかでも「同窓会、クラス会」は女性にとってのメイクを象徴的に表わしているようにみえる。

同窓会やクラス会は、学校卒業後3～5年ほどは学生時代の延長線上にかなり頻繁に開かれるが、結婚や子育てなど個々人の事情により、パッタリとなくなってしまう。復活するのは子育てが一段落する30代後半か40代になってからが多い。10数年ぶりに開かれた同窓会で、「あの人は意外にふけたわねえ」といった声を潜めた会話の一方で、「あら、〇〇さんは若いわねえ」といわれたら、やはりまんざらでもない自分を感じる。クラス会は、年代の同じ同性・異性が一堂に集まる。出席者はかつて同じ校舎に机を並べた仲間たちである。当然、横並びの意識が強く働くライバル（同性）たちだ。「少しでも若く見られたい」そんな心情がメイクを念入りにさせ、メイク比率を上げる。僚友（同性）との横並びから一歩抜き出るために「少しでも若く見られる」ことが彼女達の大きな願望であって、恐らく一つのアイデンティティに近いものではないだろうか。

図-8 外出行動とメイク

	きちんとメイク をして出かける	簡単なメイクを して出かける	取り立ててメイクは せずに出かける	(%)	n=
同窓会、クラス会に行く	54.3	39.2	6.5		508
ちゃんとしたレストラン で食事をする	52.2	41.1	6.7		552
冠婚葬祭に行く	55.5	37.4	7.1		575
一泊以上の旅行に行く	36.4	52.6	11.1		561
音楽や映画の鑑賞をする	40.1	47.8	12.1		536
P T A や子供会に行く	31.5	54.4	14.1		333
繁華街でショッピング をする	28.8	56.1	15.1		576
カルチャーセンターや 講習会に行く	26.6	52.6	20.8		418
趣味やけいこごとをする	19.5	58.8	21.7		553
食事など自分の家庭 に招く	16.0	54.6	29.4		476
スポーツをする	8.3	53.9	37.8		495
ふだんの買物をする	8.0	48.3	43.7		602

8. 学歴別にみる親の像

—— 4 年制大卒は批判型、短大卒は甘え型、専門学校卒は密着尊敬型 ——

学歴別にみた自分の父母に対する評価には、短大、専門学校、4 年制大学の差がかなり鮮明に表われている。

たとえば、母親に対しては全体として好感をもっている女性が多いが、なかでも専門学校卒女性が最も母親に密着した心境に包まれているようにみえる。一方、大学卒女性は「よき母親」の条件である「よい相談相手」としての母親に批判的であり、「女性として母のような生き方」に抵抗感をもっている。ところが、短大卒女性の場合は「女性としての生き方」よりは「イヤな部分」への不満が先走る。だから短大卒女性の「不満」は「甘え」の裏返し表現ともいえるのだ。

父親は母親に比べたら疎遠な人である。たとえ過半数を越える女性が「父として尊敬」していても、娘の眼に映る父親は「敬して遠ざかる」だけで非常に影が薄いのだ。そんな中で、父親に最もなついてくれるのは専門学校卒の女性である。「男性としてよい相談相手」「結婚するなら父のような人と」といってくれる。矛盾しているのは、ここでも短大卒女性である。「父として尊敬」していながら「男性の生き方として同意できない部分がある」などと生意気をいう。

結局、娘の眼に映る父親の姿は、母親への評価あるいは母親をととしての父親への評価という間接的な姿なのかもしれない。データは示さないが、母親に対する評価と父親に対する評価は実によく正相関している。娘にとって、母がよき母親であれば、その母を妻とした父もまた尊敬に値する父親なのかもしれない。

図-9-1 母親に対する評価

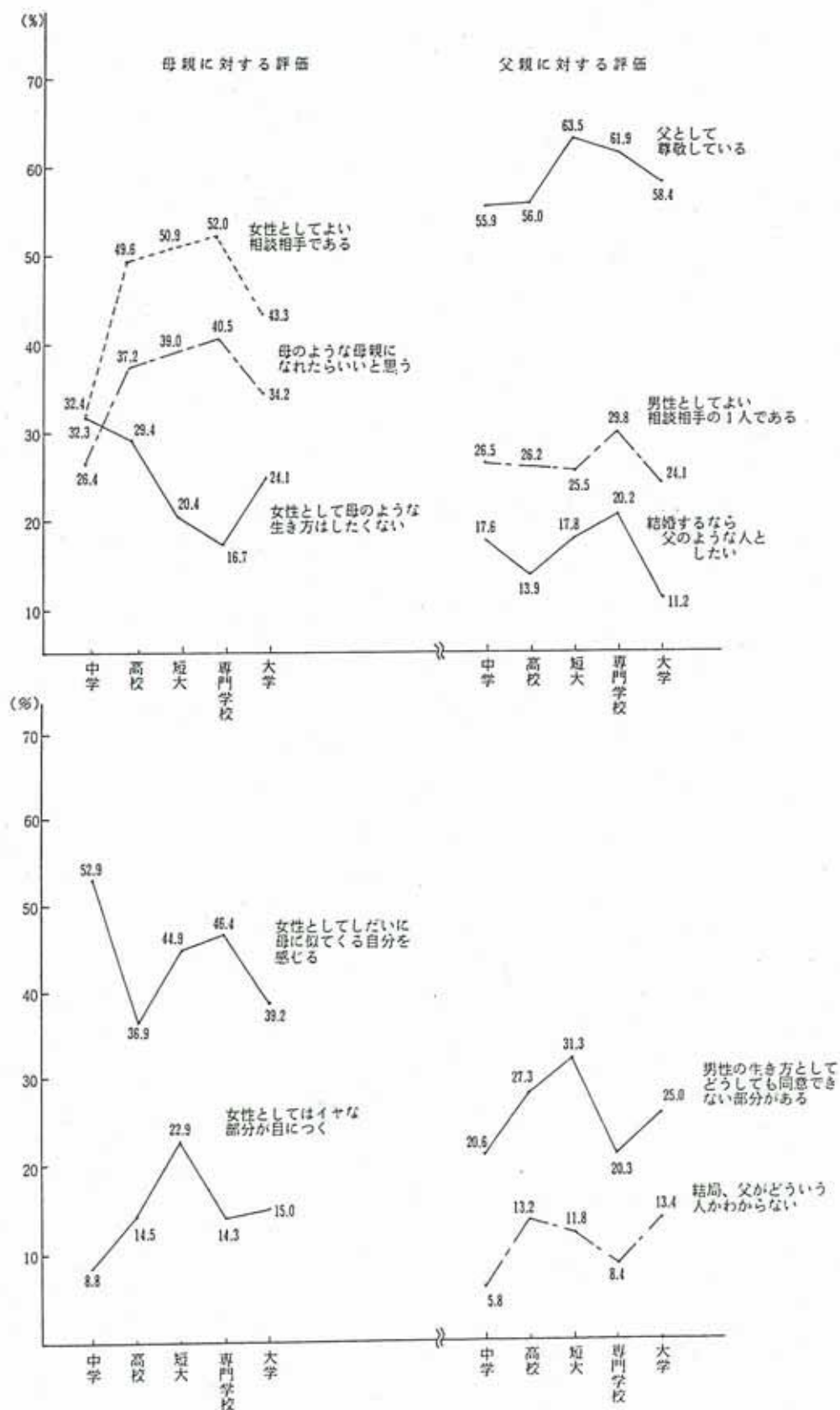
	その通り	どちらかといえば その通り	どちらとも いえない	どちらかといえば そうではない	そうではない	(%)
女性としてよい相談相手である	22.7	25.2	26.8	12.1	8.9	D.K 4.3
女性として母に似てくる自分を感じる	12.1	28.5	26.8	13.7	15.7	3.7
母のような母親になれたらいいと思う	13.7	23.0	32.7	15.2	12.7	2.8
女性として母のような生き方はしたくない	11.2	14.0	35.1	14.7	21.5	3.5
女性としてはイヤな部分が目につく	4.1	11.8	31.3	21.2	27.3	4.3

図-9-2 父親に対する評価

	その通り	どちらかといえば その通り	どちらとも いえない	どちらかといえば そうではない	そうではない	(%)
父として尊敬している	30.8	27.8	24.2	6.3	7.2	D.K 3.7
男性として同意できない部分がある	11.8	14.9	27.3	14.1	27.1	4.8
男性としてよい相談相手の1人である	10.4	15.6	24.8	17.5	26.7	4.9
結婚するなら父のような人になりたい	5.7	9.4	35.0	15.2	29.8	5.1
父がどういう人かわからない	7.4	5.2	15.8	21.0	46.0	4.6

図-10 <学歴別>

「そのとおり」「どちらかといえばそのとおり」
の比率



9. 「生まれ変わっても夫のような男性と結婚したい」=46%

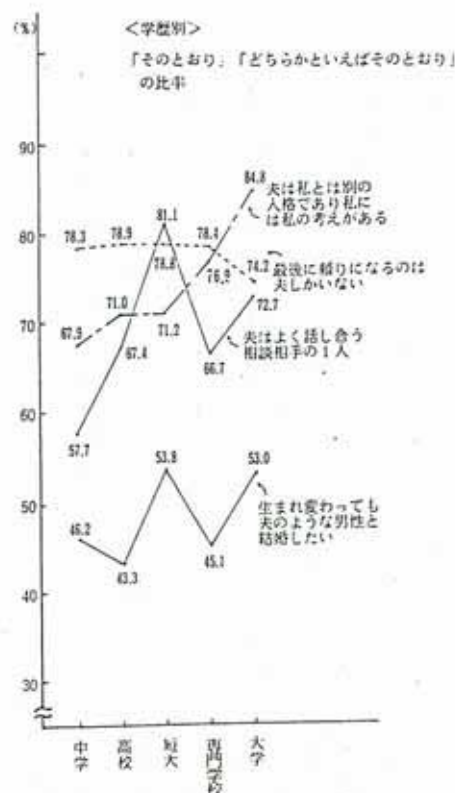
— 4年制大卒は別人格密着型、短大卒は甘え密着型、専門学校卒は自立型 —

夫はどうだろう。前提の母親・父親に対する評価でふれた、母親に対する評価と父親に対する評価との間にみられたような相関関係は、父親に対する評価と夫に対する評価との間には全くみられなかった。当然かもしれないが女性にとって夫は父親とは全く別な男性像なのだ。実際、夫への信頼は父親の比ではない。やはり「最後に頼りになるのは夫」である(87.8%)。ただ、「生まれ変わっても夫のような男性と結婚したい」という女性は過半数に達しなかった(46.3%)。

学歴別では、「生まれ変わっても夫のような男性と結婚したい」という女性は、専門学校卒女性に少なく、短大卒、大学卒女性に多い。専門学校卒女性が少ないのは彼女たちが夫より両親に一層強い密着感を抱いているためもあるが、手に職をもつ人が多く自立意識が強いからかもしれない。短大卒、大学卒女性については、短大卒女性が「夫はよく話し合う相談相手の一人」と考えているのに対し、大学卒女性は「夫は私とは別の人格である」と考えている。その意味では、夫との密着感は大学卒女性よりも短大卒女性のほうが強いといえる。短大卒女性の両親に対する「不満と甘え」は、そのまま夫への密着感となって表われるようだ。

図-11 夫に対する評価

	その通り	どちらかといえばその通り	どちらともいえない	どちらかといえばそうではない	そうではない
最後に頼りになるのは夫しかない	55.3	22.5	14.3	2.9 (5%)	5.0
夫は私とは別の人格であり、私には私の考え方がある	44.2	29.1	14.7	3.4	8.6
ふだんから何ごとについてもよく話し合う相談相手の一人	43.2	26.2	14.8	9.1	6.7
生まれ変わっても、夫のような男性と結婚したい	23.6	22.7	33.2	7.6	12.9



10. 娘離れしない母親

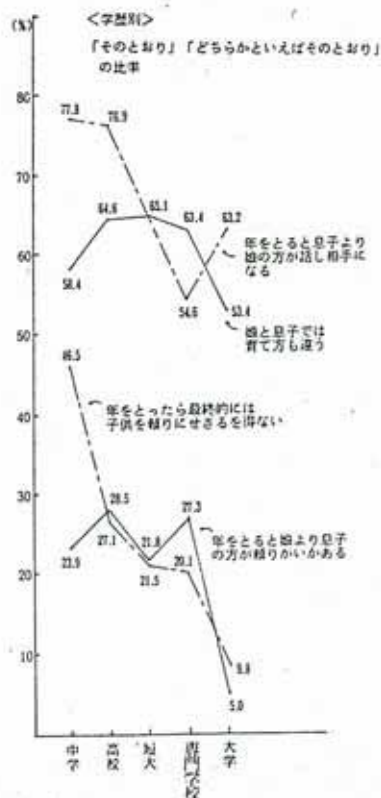
——息子への依存より娘へのコミュニケーション——

予想した通り「年をとったら息子より娘のほうが話し相手になる」という女性は7割にのぼった。そして、「年をとったら娘より息子のほうが頼りがいがある」という女性は4人に1人にすぎなかった。しかし、年齢が上るに従って、これを肯定する人は多くなる。つまり、夫に替る頼りになる男性として息子をみるようになるのだろう。4人に1人ということは、「話し相手」は別としても「子供を頼る」ことに対し、「子離れし自立する母親をめざす」若い女性たちの考えが回答を大きく支配していたからだろう。また、学歴別にみると、学歴が高いほど「子供に頼る」割合は少なくなっている。だから、大学卒女性にとっては、年をとって頼る相手が息子か娘かはあまり問題ではないのだ。それに比べると、専門学校卒女性の「娘より息子」への傾倒が目立つ。彼女たちの父親びいきとも考え合わせると、専門学校卒女性は、男性社会にとっては貴重な存在といえそうだ。

ともかく、コミュニケーションでは、頼りがいのある息子より娘への依存度は圧倒的に大きい。インタビューの中でも嫁いだ娘へつつい電話してしまうなど、娘離れができない自分を心配している母親もいた。つまり、親は健在でいるかぎりには、息子への依存より、娘へのコミュニケーションが大切なのである。

図-12 子供に対する評価

	その通り	どちらかといえばその通り	どちらともいえない	どちらかといえばそうではない	そうではない
年をとったら息子より娘のほうが話し相手になる	42.5	27.8	22.5	5.5	1.8
娘と息子では育て方も違ってくる	37.2	24.9	22.1	11.4	4.4
年をとったら最終的には子供を頼りにせざるを得ない	13.0	12.0	28.8	12.8	33.4
年をとったら娘より息子のほうが頼りがいがある	15.8	8.5	53.4	7.3	15.0



あ と が き

——女性の群れと男女棲み分け——

本調査の結果検討の中で、「なるほど女性は本当によく同性同志で群れるけど、男性も同じことがいえる。しかし、女性の群れは男性の群れと違って、絶対にその群れは運命共同体ではないね」という意見が出た。つまり、男性の群れだって運命共同体ではない場合もあるけど、ある場合もある。女性の群れは血縁の家族以外に運命共同体の群れはまれではないかということだ。共感し合い、コミュニケーションを交わし、行動をともにするが、その中にはリーダー的な人はいないか、いても強い力はもち得ない。つまり、男性のように集団組織的ではない。従って、共感しなければ行動も起こりにくい。どちらかといえばメダカの学校で誰が先生か生徒かがわからない。言わば、組織でなく、生命をはぐくむという行動を主体とするための群れなのである。つまり、女性の生活行動は生命の流れに従っているからかもしれない。あるいは、より文化的というのか一つところにとどまらない傾向がある。それに比べて男性は、社会構造の枠をつくっているため、社会の基盤になる組織という構造体としての骨や筋肉のような社会をもっているのかもしれない。

その意味で男女棲み分け社会をある程度保つことは、社会を安定に維持する上で必要なことかもしれない。

女性の男性社会への埋没によって甲冑魚のような社会になるのも、男性の女性化によって軟体動物のような社会になるのも安定性の面から適当ではないし、楽しくないのではないだろうか。